

平成 29 年度 大学入学共通テスト 試行調査 国語【解答】

問題 番号	設問	解答 番号	正解	配点	問題 番号	設問	解答 番号	正解	配点
第 2 問 (50)	1	1	2		第 4 問 (50)	1	1	1	
		2	1			2	2	4	
	2	3	2			3	3	1	
	3	4	3			4	4	5	
	4(※1)	5	2-6			5	5	3	
5	6	3		6	6	3			
第 3 問 (50)	1	1	5		第 5 問 (50)	1	1	1	
		2	4				2	5	
		3	5			3	3	2	
	2	4	3			4	4	4	
		5	2			5	5	5	
	3(※2)	6	3			6	6	3	
		7	2-6			7	7	1-6	
	4(※1)	7	2-6			6(※2)	8	3	
	8	4		9			5		
	5	9	2			10	5	5	
10		5		※1:順序を問わない。また、過不足なくマークしている場合のみ正解とする。(正解のいずれかをマークしている場合の部分点の有無は検討中である) ※2:両方正しくマークしている場合のみ正解とする。 ※3:順序を問わない。また、過不足なくマークしている場合のみ正解とする。					

※第 1 問の記述式問題は見送りとなったので省略した。

※配点は非公表である。



平成 29 年度 大学入学共通テスト 試行調査

国語

Foresight 現役東大生の個別学習指導
オンライン家庭教師

■ 出題分析

配点	試験時間	大問数	センターとの難易度比較
200点+記述式の評価	100分	5題	やや難
センターとの分量比較			
減少■同程度□増加	設問数1問、解答数3問減少(どちらも記述式を除く)		

<トピックス>

- 試験時間が20分増え、第1問現代文で記述式の設問が導入された(2020年度の導入は見送られている)。
- 従来の第1問評論文・第2問小説・第3問古文・第4問漢文という大問構成に代わり、第1問実用的な文章、第2問評論文、第3問小説、第4問古文・第5問漢文という大問構成がとられた。
- 第2問～第5問で複数のテキストや表が用いられた。

■ 全体分析

記述式の設問が導入されたことで従来と比べて設問が1問増え、分量が増加した。また、論説文では文章と図表を関連付けた問題が出題され、小説や古典では一部の問題が文章同士の比較を要求するものとなった。個々の設問においては、単純に漢字や語彙のみを問う問題が減少し、複合的な事項を問う問題が増加した。そのため、試験時間は増加しているものの、センター試験と比較し正確でスピーディーな情報処理が求められる形式になったといえる。

■ 大問別分析

※ 難易度は5段階表示で、フォーサイトの見解によるものです

問題	出題分野・テーマ	センター試験との相違点・コメント	難易度※
一	現代文	センター試験では出題されていなかった、実用的な文章の読解を求める記述式の問題。字数は少ないながらも文章と図表の複合的な読み取りが求められ、全く新しい形式の問題といえる。	(省略)
二	現代文・論説文と図表	従来の第1問と異なり、本文に傍線部が引かれていないほか、図表が豊富に使用されている。また、漢字の問題や会話形式の問題が削除されて本文独自の概念の理解を問う問題を中心に出版されており、「本文を踏まえた議論」についての設問では新たな観点が加えられている。従来のような本文自体の読み取りに加え、本文に関連する図や表が持つ意味を読み解くことが求められる。	やや難
三	現代文・小説	従来の第2問と異なり、語句の意味を問う問題の代わりに漢字問題が出題されている。また、表現の根拠を問う問題や、本文とその元になった童話を関連付けた問題といった新しい形式の問題も見られる。しかし、設問数は従来と比較して少なく、問題の解きやすさもそれほど変わらないと思われる。	標準
四	古文・物語	従来ひとつであった問題文が3つとなったため登場人物も増え、情報量が多い。従来の第3問より設問数が減少しているものの個々の問題が解きにくく、難易度が高い問題と言える。	やや難

©Foresight Inc.

本サービス・コンテンツの知的財産権その他一切の権利は株式会社フォーサイトに帰属し、無断転載・引用を禁止します。



五	漢文・歴史的文章	従来の第4問と似た構成ではあるものの、テキストがふたつに増え、漢文と漢詩の両方が出題されている。しかし、問われている事項は概して基本的であり、設問数もセンター試験より少し多い程度である。そのため、難易度は標準的といえる。	標準
---	----------	--	----

■ 合格への学習アドバイス

正答率が特に低い問題として、

- ①テキスト同士やテキストと図表の関連性を問う問題
- ②日本の言語文化と外国の文化の関係について問う問題(漢文で)

が挙げられる。これらの形式の設問は過去にはあまり出題されていなかったため、十分に対策し慣れておくとうまいだろう。

しかし、従来のセンター試験でも出題されていた

- (1) 語句の意味を問う問題
- (2) 和歌の解釈を問う問題

の正答率も高いとはいえない。そのため、これらの事項に関しては「従来通りの」対策を行うことも必要になる。

「全体分析」でも述べた通り、共通テストではセンター試験と比較してスピーディーで正確な情報処理が求められている。これらを踏まえて効果的だと考えられる対策は以下の3つである。

- ・従来通りの基礎的な漢字や語句(現代文)、単語や文法・修辞法(古典)などの徹底的な学習

漢字や語句、単語が直接問われる問題は減少しているが、速く確実に文章を理解するために基礎知識が必要なことには変わらない。知識の穴を残さないことが重要である。

- ・共通テスト形式の問題を、実際より短い制限時間で演習すること

テキストや図表同士の関連付けといった新傾向の問題に慣れるため、演習は必要不可欠である。本番ではどうしても焦りが生まれ、読解のスピードが落ちることが多い。時間が不足することがないように、予め短い時間での演習を行っておくと良いだろう。

- ・文学史や背景知識の理解

漢文で「日本における漢詩文化」を問う問題が出題された。問題において生徒が実際に学習活動を行う場面が多く設定されていることを考えると、単なる文章の読み取りだけではなく、授業内で学ぶが従来着目されてこなかった歴史的背景・文学史といった分野が出題される可能性もある。これらの事項を普段から意識して学んでおくことは、スムーズな文章の読み取りのためにも有意義であろう。

第2問 論理的な文章

講評	所要時間	難易度
講評	得意…15分 ふつう…20分 苦手…25分	★★★★★
<p>センター試験国語第1問に対応する、論理的な文章の出題である。</p> <p>従来のセンター試験と比較したとき、本問の特徴としては次の四つが挙げられるだろう…</p> <p>① 本文に加え豊富な図表も出題されていること</p> <p>② 本文そのものにはいっさい傍線部が引かれていないこと</p> <p>③ 漢字問題が問3の文学的文章に移動していること</p> <p>④ 本文の内容に基づく議論の評価を問う設問(問5)が、センター試験で出題されていた「5人の生徒の話し合い」から、新たな観点を加えた意見の比較へと変化していること</p> <p>しかし、このH29年度共通テスト試行調査第2問の場合、その解きにくさは別の要因によるものかもしれない。まず、本文・図表についていえば、扱われている主題・主張の難しさ以上に、筆者の言葉遣いの癖が強いことが理由で読みにくくなっている。また、設問に関しても、常識的な読解の約束にしたがう限り、解答を導くのがきわめて困難なもののみられた。具体的な指摘は個別の設問解説でおこなうが、自分の読解力を正確に見積もるためにも、ぜひ参考にしてほしい。</p>		

設問解説

問1

正解 A ② B ①

解説

A 機縁物語性

問1のAはこのH29年度試行調査国語第2問でもっとも難しい設問のひとつだ。その理由は、おそらく出題者が意図したと思われる考え方は、解答にたどり着くことができないという点にある。そこで、この解説では①出題者の意図した解き方、およびそれがうまくいかない理由を説明したうえで、②それでも解答にたどり着くための邪道な解き方を説明する。

① 出題者が意図した解き方(はなげうまくいかないのか)

おそらく、本問の出題者が意図した(読解の約束に比較したがった)解き方は次の通りだ…

- a 文章中で「機縁物語性」の意味を明示的に説明した箇所を探す
- b 「機縁物語性」が表一中で「路地空間システム」の「構造」にあたることを把握する
- c 文章中で「路地空間システム」の「構造」を説明した箇所を把握する
- d 「路地空間システム」の「構造」を説明した箇所と各選択肢の内容を照らし合わせる

しかし、このやり方で正解にたどり着くのは至難のわざだろう。

まず、手順aは読解の約束に完全にしたがった考え方だ。用語の意味を知る最善の方法は筆者が明示的にその定義を説明した箇所を読むことだ。しかし、与えられた本文中で「機縁物語性」の意味を説明した箇所はない。

がって、手順 a で「機縁物語性」の意味を知ることができない。

これが「現代文の入試」という特殊な条件のもとでの読解でなければ、次に取る手順はいくつか考えられる。出典となつている文章の出題範囲外の箇所を読んだり（巻末に語句索引がある本なら簡単だ）、建築にかんする事典を引いたり、筆者のほかの文章を探したり、ネットで検索したり、究極的には「筆者に直接問い合わせる」という選択肢すらある。だが、「与えられた時間内で・与えられた文章のみに基づいて読解する」という現代文試験の特殊な条件がある以上、これは不可能だ。

そこで次にすべきは（出題者の意図に乗って）図表を利用することだ。表一を見れば、「機縁物語性」が「路地空間システム」の「構造」上の特徴であることはわかる（b）。そこから c・d の順に考えていけば、筆者が明示的に与えた定義には劣るが、次善といえる用語の意味の推測が可能になるはずだ。

しかし、実際には、読者が b・d の手順をたどることはほとんど不可能だ。というのも、読者には、表一が「近代道路空間計画システム」と「路地空間システム」を「何として」比較した表であるか、この表の各項目が何を意味するか、この表と文章とをどのように関連づけて読めばいいかといった、表を読むうえでの基本的な事柄がよくわからないのだ。

表 1 からは「近代道路空間計画システム」の「構造」が何を指すかは理解できない（「空間システム」が何なのかよくわからず、「空間システム」の「構造」が何を指すかはなおのことよくわからない）。表 1 から「空間システム」の「構造」が何を指すがわからずとも、文章と図表の対応がきちんとしていれば、文章の方から「空間システム」の「構造」の意味、そして「近代道路空間計画システム」の「構造」上の特徴である「機縁物語性」の意味を推測することもできる。しかし、ここでは図表と文章の関連づけが不明瞭で

あり、文章中のどこが「空間システム」の「構造」の説明になっているかを無理なく（＝読者が過剰な推測をすることなく）判断するのはほとんど不可能だ。

したがって、出題者の意図した解き方は現実的でない。

② それでも解答するために

通常の読み方・解き方にしたがう限り、「機縁物語性」の意味を理解することはできない。しかし解答にはたどり着きたい。そこで読者が利用できるのは、共通テスト（及びセンター試験国語）の特徴だ：正解の選択肢の内容はすべて本文に書かれていることの抜粋もしくは言い換えた。逆に言えば、本文に書かれていないことを述べている、もしくは本文に書かれたことに反することを述べている選択肢が誤りだ。

一般的な設問であれば、選択肢を読まずとも、文章のみを読み、そこから通常の読解のお約束にのみしたがって大体の解答を導き出したあとで、その解答と選択肢を比較することにより正しい選択肢を選ぶことができる。この発想は、難関大学の現代文対策として有名な「選択肢を読まずにセンター試験現代文の解答を作る」という方法の前提になっている。しかし、問 1 A の場合、この発想が通用しないことを①で確認した。次に受験生が取れる手段は、前段落で述べた共通テスト・センター試験の特徴を利用することだ。

各選択肢を見てみよう。まず、①は本文の記述にないことを述べている。「緑の配置」「自然の大切さ」「環境に優しい」といった内容は本文にない。あえて近い内容を述べた箇所を挙げるならば、第 2 段落の「日本の老時空間には西欧の路地にはない自然性がある」という一文だろう。しかしここでは「自然保護」というような意味合いで「自然」という言葉が用いられているわけではない。したがって、本文の記述に反している。

③は「外部と遮断された自立的な構造」という箇所が本文の記述に反する。第 2 段落の最終文に「ソトの空間から区切られているが通行空間としてつながるこの微妙な空間システム」という記述がある。これは「外部と遮断された」わけではない、ということを書いている。

④はまったく本文の記述にない内容である。

⑤は③と同じ箇所の「通行空間としてつながる」という記述に反する。

一番「まし」なのが残る②だ。この選択肢が根拠としているのは第 2 段落最終文の「近隣コミュニティの中に相関的秩序があり、通行者もそれに対応できているシステムがある」という箇所だろう。「相関的秩序」という言葉や通行者がシステムに「対応できている」という表現の意味は本文を読んでもよくわからないが、選択肢②はこの 2 点をそれぞれ「まとめり」「参入できる」という意味で解釈している。これも通常の読解の方法からいえば少しアヤシイことをやっているが、ほかの選択肢に比べれば許容範囲だろう。

B 広域空間システム

B の「広域空間システム」の意味の考え方についても、およそ A の「機縁物語性」と同様のことがいえる（ので、省略する）。「広域空間システム」が「空間システム」としての「近代道路空間計画システム」の「空間」にあたる、ということさえ理解しておけば、あとは選択肢と本文の記述の照らし合わせによって解答が得られる（「空間システム」としての「近代道路空間計画システム」の「空間」としての「広域空間システム」とは何ぞや、ということを考えてよいということだ）。加えて、本文の随所の記述からわかるとおり、筆者は「近代的」と「西欧的」をだいたい同じ意味で用いていることも確認しておけば十分だ。

各選択肢を検討する。各選択肢は「〇〇した（された）」+「××的空間システム」という形をしている。このうち後者の「××的空間システム」についてはいずれの選択肢も問題ない。「合理的・近代的・欧米的・均質的・機能的」がすべて表 1 の「近代道路空間計画システム」の側に属することからわかる（と出題者は考えているだろう）。したがって、比較・検討すべきは「〇〇した（された）」の部分だけだ。

最も適当なのは①である。「中心都市を基点として拡大延長された」という内容は第 7 段落 2 文目の「ローマから拡大延長された西欧の道路空間」という記述に対応している。したがってこれが解答である。

不正解の選択肢

②「区画整理されながらも原風景を残した」という内容は本文にない。

③「近代化以前のアジア的空間と融合した」という内容は第 7 段落 4 文目の「日本の都市は、アジアの源流と欧米の源流の重複的形式の空間形成になっている」という記述に対応する。しかしここではっきり述べられているとおり、これは「日本の都市」の特徴だ。したがって本文の記述に反することを述べている。

④「産業技術によって地形を平らに整備した」という内容は本文にない。

⑤「居住空間を減らして交通空間を優先した」という内容は本文にない。

問 2

3

正解 ②

解説

路地の「パッケージ型」と「参道型」については第 6 段落で論じられている。「パッケージ型」「参道型」の説明として適当な選択肢を検討する目的からいえば、段落全体の内容を整理する必要はない。しかし、この段落の後半はかなりわかりにくい日本語で書かれており、解答への到達という試験のうえでの目的ではなく、本文の理解という読解本来の目的に照らしたとき、解説の必要がある。そこで本解説では、第 6 段落全体の解説を行い、そのあとで「パッケージ型」「参道型」についての説明をまとめる。

第 6 段落最初の二文では、「まず」「また」という言葉を用いて、次のふたつ事柄が、日本の「道空間」の特徴として並列的に述べられている：

① 日本の道空間の原風景は「区画された街区」ではない。

② ローマから拡大延長された西欧の道路空間と日本の道空間は異なる。

続く 3 文目はこの①②を敷衍した内容にあたる。ここでは大きく分けて三つのことが述べられている。第一に日本の道空間は目的到着点をもつ「参道型空間」が基本であること。第二に「参道型空間」は「地域内の参道空間から折れ曲がって別れ、より広域の次の参道空間に結び付く」形式をしていること。第三に、第一の点ゆえに、日本の道空間は西欧の「グリッド形式」「放射形式」の道路と異なることだ。

4 文目・5 文目は、3 文目の第一・第二の点をさらに詳細に説明している。4 文目は「参道空間」「店と住居」「その裏側の空間」「路地」の位置関係を記述することで、「多くの日本のまち」が、道と建物とがどのように組み合

わさってできているかを述べている。5 文目は筆者の言葉遣いの癖が強く出ており、一見すると何を言いたいのかがよくわからない。5 文目は次のように分節できる：「これは・a 城下町にも組み込まれて・b すきまとしての路地があるがゆえに・c 連続的かつ持続的だといえる」

このように分節すると、5 文目の「わからなき」がより明瞭になる。まず、a・b・c それぞれの主語（b の場合は「何に」）がわからない。次に、「これ」が指す対象が自明でない。さらに、「連続的・持続的」が「何と・どのような意味で」連続的・持続的なのかがわからない。最後に、b「すきまとしての路地がある」ことと c「連続的かつ持続的だといえる」ことが「ゆえに」で結びつく理由がわからない。詳細な説明は省くが、この a・b・c についてまじめに検討するのは骨が折れるし時間の無駄だ。読み飛ばすのがよい。

続く 6 文目も読みにくい。冒頭の「それによって」を除いた「面的に広がつた計画的区画にある路地は・同様のものが繰り返し連続するパッケージ型路地として・前者の参道型路地、クルドサク型路地と区分できる」という部分は比較的わかりやすい。しかし、「それによって」の「それ」が何を指すのか、「それによって」が後に続く部分のどこに係るのかについては、読み取るのが難しい。

常識的な日本語感覚にしたがえば、その直後に読点が入らないことを理由に、「それによって」に係る先は「面的に広がつた」と考えるのが自然だ。しかし、「それ」によって「計画的区画」が「面的に広がるような「それ」の指示対象を第 6 段落の中に見出すのはおよそ不可能に思われる。したがって、「それによって」に係るのは別の場所だ。

ほかにその候補になりそうなのは、最後の「(前者の参道型路地、クルドサク型路地と)区分できる」という箇所のみだろう。この箇所に「それによって」に係る以上、「それ」の内容は、「パッケージ型路地」と「参道型路

地、クルドサック型路地」を区別する根拠としてふさわしいもののはずだ。そのような指示対象を第 6 段落から抜き出すとしたら、「同様のものが繰り返し連続するパッケージ型路地」と対比される特徴を「参道型路地（・クルドサック型路地）」が備えていることを説明した 3 文目が妥当だろう。

設問になっている「パッケージ型」「参道型」路地についての説明は、それぞれ 6 文目と 3 文目にある。「パッケージ型路地」については、6 文目で「同様のものが繰り返し連続するパッケージ型路地」という記述がある。「参道型路地」については、3 文目の第一・第二の部分（日本の道空間は）目的到着点をもつ参道型空間が基本だ」「参道型空間は地域内の参道空間から折れ曲がって分かれ、より広域の次の参道空間に結び付く形式だ」という記述がある。この記述と一番近いことを述べている選択肢は②だろう。

不正解の選択肢

- ① 「パッケージ型」「参道型」どちらの説明も不適當。「パッケージ型」が車優先の路地だという記述は本文にない。「参道型」が「手つかずの自然」を残しており「原始的」だと論じた箇所もない。
- ③ 「パッケージ型」「参道型」どちらの説明も不適當。「一元化された」路地が何を意味するのかが不明。また、「パッケージ型」の特徴は「中心城市から拡大延長」されたことだという説明はない。「参道型」が「祠のような」目的到達地点をもつこと、「独自性を競い合う」ことは本文の記述にない。
- ④ 「パッケージ型」「参道型」どちらの説明も不適當。述べられているのは「ニューヨークがグリッド街路の原型をギリシャ都市に求め」たということ

とであり、ギリシャの都市が同心円状であるとも、「パッケージ型」がそれをモデルにしたとも書かれていない。「参道型」についての記述も本文にないことを述べている。

⑤ 「パッケージ型」「参道型」どちらの説明も不適當。「パッケージ型」の説明に「通り抜けができる/できない」という要素はかかわっていない。「参道型」が「迷路のよう」だという記述も本文にない。

問 3 4

正解 ③

解説

江東区について論じられているのは第 8・9 段落である。したがって、江東区がどのように整備された街区の具体例として取り上げられているかに注意しつつ、第 8・9 段落の内容を整理すればよい。以下の文章における○内は解説者。

第 8 段落を見てみよう。3 文目では、「江東区の方形整形区画方式は掘割とともに形成された」とある。4 文目では前文で述べられた「方形整形区画方式」の形成について、「区画整理街区も、水面に沿った路地と接して形成されてきた」とより詳細に説明している。

続く 5・6 文目からは、江東区で行われた方形の区画整理について、近代以降繰り返し（街区形成の時も、その後戦争・地震の被害に遭い修復する際も）行われ、近代日本における市街地整備の典型例となっていることが読み取れる。また、段落最終文「しかし〜であろうか」では、江東区における「理

想とした成果・持続」の実現が疑問視されている。

では、「理想とした成果・持続」とは何を指すのだろうか。その答えを探すためには、第 4・5 段落を参照する必要がある。第 4 段落では住宅と都市の「理想環境」という言葉が登場し、西欧の都市における「理想」のあり方が説明されている。

注目すべきは、前段落と対比する形で、日本・アジアの都市の基本的性質である「非西欧都市」について論じられている第 5 段落だ。この段落で筆者は、「非西欧都市」の形成過程をどう持続させていく(後世に受け継ぐ)か、という課題の骨格は「体験空間の形成・記憶の継承」と「路地的空間の持続」だと論じ、日本の「ムラとマチ」では「山と海(周囲の自然)に生活空間(体験空間)が結びついていた」「路地は地形(＝自然)に深く結びついて継承されてきた」と述べている。要旨の把握が難しい段落だが、上述の内容をまとめると、筆者は日本(やアジア)の理想的な「住宅と都市」の重要な要件を、自然と深く結びついた生活空間・路地が継承されていることだと考えている事が読み取れる。

第 8 段落に戻ろう。3～6 文目で述べられた江東区の市街地整備(近代日本における代表例)は、一見すると理想的なものだ。なぜなら、「水面に沿った路地と接して」街区を形成する方式は、自然との結びつきを維持しているように見え、またこの方式が近代以降持続的・全国的に行われていることも述べられているからだ。だが、「しかし」から始まる段落最終文では、江東区の市街地整備が理想的なものではないことが示唆されている。この理由について書かれている第 9 段落を見ていこう。

第 9 段落 1～3 文目では、地形、自然が残ったまま魅力ある市街地となった「山の手」に対して、江東区では「計画が機能的・経済的に短絡されてきた」と述べられている。また、第 4 文では江東区の居住区形成について、区

(画整形を行うなら本来は「水面水路(掘割)との計画的な配慮が必要だった」と述べている。では「計画的な配慮」とはなにか。ふたつ後の二文で、筆者は「計画的な配慮」について「体験されてきた(歴史的な)空間を誇りをもって継承する意思」「路地的空間の継承」である、と論じている。これは、第 5 段落で述べられている「体験空間の形成・記憶の継承」と「路地的空間の持続」にそれぞれ対応した内容だ。第 5 段落後半では、「体験空間」「路地的空間」の自然との結びつきの強さが述べられていた。このことから、「体験空間」「路地的空間」を形成・継承するために行う「計画的な配慮」も、都市と自然との結びつきを維持することを重視したものだという筆者の考えが推測できる。ここで、江東区で区画整理を行う際、掘割を埋め立てて道路とした箇所があること(注 4 参照)、また図 3 の写真が①道路のものであることに着目してほしい。掘割を埋め立てた江東区の区画整理は、筆者にとって「自然とのつながり」を弱めるものだ。そしてこのことは、江東区の区画整理には「計画的な配慮」が欠けているから生じている、と筆者は考えているのだ。

以上の読解から、第 8・9 段落では、「歴史的な路地的空間(江戸時代からの伝統的な掘割)」を埋め立て、機能性や経済を追求するため自動車交通(近代道路空間計画システム)の主体である()のための空間とした江東区の区画整理を、自然と結びついた「体験空間」「路地的空間」の継承が行われていないことを理由に批判していることが分かる。

選択肢を見てみると、図 3 を「江戸から継承された水路を埋め立て、自動車交通に配慮した近代の空間に整備された例」としている③が正しい。

不正解の選択肢

- ①「江戸の歴史的な町並みを残しつつ」が不適当。前述のように図 3 の区画整理が自然を尊重し、歴史的空間を継承したものでないことを踏まえていない。
- ②「空間的記憶とその継承を重視して」が不適当。理由は①と同様。
- ④江東区についての記述ではない。オープンスペースを魅力とする再開発は、第 9 段落最終文で「新区画街区の傍ら」の「工場敷地跡」で行われる、と書いてある。
- ⑤「地の利を生かし」が不適当。理由は①と同様。

問 4 5

正解 ②・⑥

解説

「路地空間」「路地的空間」という本文中のキーワードの理解を問う問題。それぞれの選択肢を注意深く検討し、正答 2 つを選択する。

②正しい。第 5 段落最後で「結果として、路地は地形に深く結びついて継承されてきた」と述べていることや、第 9 段落で「魅力ある市街地」として取り上げられている山の手について「否応なく地形、自然が関連する」と記述していることから、路地は地形に基づいて形成されてきたといえる。

⑥正しい。第 9 段落で「歴史的な空間の記憶を、継承する努力」が「路地的空間の継承」と言い換えられていることを踏まえると、路地的空間を「土地の記憶を保持している生活空間」とすることに問題はないといえる。

不正解の選択肢

- ①第 6 段落冒頭で「日本の道空間の原型・原風景は区画された街区にはない」と述べられており、表 2 の分類を見ても「区画内型路地」はすべて意図的に形成されたものである。よって、「自然発生的に区画された」は「路地空間」や「路地的空間」の説明として不適当と言える。
- ③「路地」をイメージできれば容易いが、図 1 の「参道型路地的空間」の写真を見ても路地から大自然の景観を一望できないことはわかるだろう。
- ④確かに路地空間には「自然性」が存在するが、例に挙げられている向島地区や山の手は東京という大都市の内部に存在し「都市とは異なる自然豊かな生活空間」とは言い難い。図 5 を参照するとわかりやすいだろう。
- ⑤「通行者の安全性」については、本文中で触れられていない。

問 5 6

正解 ③

解説

本「路地的空間」の長所と短所について、「緊急時や災害時の対応」という新たな観点から考察する問題。目新しく感じるが、ひとつひとつの選択肢が長所と短所各一文で構成されているため、それぞれの選択肢について一文ずつの正誤を吟味することで解答が得られる。

③正しい。本文最後の 2 段落を読むと、向島地区の例で路地的空間(地域の継承空間システム)が「居住者の持続的居住欲求」や「地域の原風景への希求」により保存されてきたと書かれており、「あらゆる地域コミュニティ

の原点」である地域の原風景に位置付けられ高い評価を得ていることが分かる。そのため、「豊かな自然や懐かしい風景が残存」し、「持続的に住みたいと思わせる」「相互扶助のコミュニティが形成されやすい」生活空間である、という説明は正しい。路地的空間の短所は本文中では触れられていないが、区画されていない「多様で複雑」な空間であることや、狭い路地のイメージから「災害時の避難・緊急車両侵入に不便」という後半部分も正しいと考えられる。

不正解の選択肢

① 「密なコミュニティを形成する」という長所には第 2 段落の「路地の継承のためには、近隣コミュニティの中の相関的秩序が必要」という趣旨の記述や、最終段落の「路地はふれあいの原風景」を参照する限り問題がなさそうに思われる。しかし、「自然信仰的な秩序と共にあるため、近代的な計画に基づいて再現することが難しい」点は短所とは言い難い。第 5 段落で「この根本的な次元では、原風景をも計画対象とすることが必要になっている」と書かれているように、路地的空間(最終段落で述べられている「村とまちの原風景」に含まれる)を再現するためには、新たに市街地計画を行えば良いからだ。

② 「自然との共生や人間同士の触れ合いを可能にする」という「路地的空間」の長所についての記述は正しいが、短所についての「居住空間と通行空間が連続的に広がらず」という記述が誤り。「居住空間と通行空間が連続的に広がる」のが路地空間の特徴である(第 6 段落の「多くの日本のまちは」以降を参照してほしい)。

④ 表 1 を見ると分かるように、「機能的な道・道路」は路地的空間ではなく

近代以降に計画された道路に関する説明である。③の解説で路地の不便さについて述べたように、路地的空間を「機能的」と説明することは難しい。⑤前半部はおおむね正しいと考えられるが、「価値観があまりにも異なるため共存できない」という記述は本文中にない。また、本文最終段落では路地的空間と開放高層居住空間に関し「二者択一ではなく、地域・地区の中で両空間モデルが補完・混成して成立するシステム」の存在が言及されており、両者が共存し欠点を補いあうようなまちづくりが可能であるという筆者の考えが読み取れる。そのため、路地的空間と開放高層居住空間が「共存できない」という考えを本文から推論することはできない。よって、2 文目を誤りと判断することができる。

第3問 文学的な文章（小説）

講評	所要時間	難易度
講評	得意…15分 ふつう…20分 苦手…25分	★★★★☆
問題形式の面でも一部に変化が見られるが、問題自体の難度や所要時間はセンター試験とさほど変わらない。しかし、今回の場合は設問ごとの選択肢の数が少なかったため、問題自体の易しさに加え、時間的な余裕も解きやすさに寄与していた。したがって、今後各設問の選択肢が増えた際には、制限時間内で満足に解き終えることが難しくなると思われる。		

設問解説

問 1

正解 (ア) (イ) (ウ) (エ) (オ)

解説

本問は、従来のセンター試験における国語第1問の問1と同じ形式の漢字問題であった。漢字の読みに書きを対応させることができているかを問う問題であったが、難易度はそれほど高くない。以下、各問について簡単にコメントする。

(ア) 「ぎょうぎょうしい」は「大げさである」という意味の言葉で、漢字では「仰々しい」と書く。各選択肢については以下の通りであるため、正解は⑤。なお④の「異形」とは、「普通とは違った形。怪しい姿」という意味の言葉である。

(イ) 「とうらい」は「到来」と書く。各選択肢については以下の通りであるため、正解は④。いずれの選択肢も四字熟語の一部分になっている。知らなかった言葉に関しては、仮名部分の熟語を覚えることも大事だが、四字熟語自体を覚えることがより重要だ。今回出題されたような四字熟語は、いずれも現代文の文章では説明や注なしで使われるのが普通だろう。したがって、スムーズな読解のために、重要な四字熟語についてその意味を理解しておく必要がある。

(ウ) 「しよたい」は「所帯」と書き、これは「一戸を構えて独立の生計を営むこと」という意味である。「一戸を構える」とは「自らの家庭や住居をもつ」ことを意味する。各選択肢については以下の通りであるため、正解は⑤。

解答選択肢

- (ア) 仰々しい ①業績 ②苦行 ③凝縮 ④異形 ⑤仰天
- (イ) 到来 ①奮闘 ②転倒 ③当意 ④周到 ⑤不党
- (ウ) 所帯 ①悪態 ②台頭 ③怠慢 ④安泰 ⑤帯同

問 2 4

正解 ③

解説

本文中の異なる文と文との関係を問う、センター試験ではあまり見られなかったタイプの設問。傍線部 A にある「彼」の「風変わり」さを説明する際、その根拠としてふさわしい一文はどれかを問っている。

この設問を解くうえで大事なものは、受験生(いまこの文章を読んでいるあなた)が「彼」の「風変わり」さを示していると感じた記述がどれかではない。確かに、ひとりひとりの読者が受けた印象は重要だ。しかし、授業や試験においては、作者や語り手が、どのように事態(自分の見たことや聞いたこと、考えたことなど)を記述しているか、事態をどのようなものとして読者に伝えようとしているかを、その記述にもとづいて考える必要がある。今回の場合、重要なのは、それぞれの文から、その一文によって、語り手である「あたし」が「彼」の「風変わり」さを示そうとしていることが読み取れるかどうかである。

この基準で考えたとき、最も適当なのは③である。「彼」の「遠くを見るようなまなざし」での語りに、他のツバメが「彼」への興味を失くしたという旨の文である。③と④の間の波線のない文章中でも「遠くを見るまなざし

など必要ない」と書かれており、「風変わり」ではない普通のツバメにとってはまったく実利的でない遠くの地の話を繰り返す、他のツバメとの間に距離ができてしまった「彼」の「風変わり」な側面が描かれているといえる。また、③では四つの文で唯一「彼」に対するネガティブな記述がなされている。結果的に「風変わり」な「彼」が群れを離れることから、この選択肢の記述は「彼」の「風変わり」な点は群れのツバメたちにとって好ましいものではなかったという前提とも合致する。

不正解の選択肢

- ①文の終わりに、順接に続いて「あたしたちの群れに、問題なく受け入れられた」とあり、この段階で「彼」の「風変わり」な点を示す記述はない。前半部はツバメとしての特徴を挙げているだけで、この特徴から「風変わり」には結びつかない。
- ②「彼に興味を示すものは何羽もいた」のは「彼」が①の前半部に書かれた特徴を持っていたためであり、「彼」が「風変わり」であることとの関係は見えない。
- ④「彼」が③のような「風変わり」な特徴を持っていながらも、どうにか「普通の」ツバメたちの群れで一緒に過ごしたという旨の記述であり、「風変わり」な点を示すのとは逆の役割になっている。

問 3

5

6

正解 【I群】② 【II】③

解説

「彼」と「あたし」の発言の意図に関する問題。両方正解して点が与えられるという形式ではあるが、双方が単純な裏表の構造になっているわけではないため、三択とはいえどちらの問題にも慎重な読解が求められる。

【I群】

「彼」が「あたし」に向かって言った「君なんかには(中略)わからないさ」という発言の意図を問う設問。この「彼」の発言は本文 37 行目からはじまる「あたし」と「彼」の一連のやり取りの中で発されたものだ。したがって、「こ」で「彼」が抱いていた「思い」について考えるためには、このやり取りをよくみる必要がある。そこで、目的である「彼」の「思い」はひとまず後回しにして、37 行目からのやりとりを整理しておこう。

やり取りは「あたし」の質問から始まる。「いよいよ明日は渡りに発つ」という日、群れのほかのツバメたちと違い、町に残るつもり「彼」に、「あたし」はその意図を尋ねる。「彼」は、「あの方」(Ⅱ丘の上の王子の像)から王子の像の宝石や金箔を「貧しい人たちに持って行」くよう頼まれたからだ、と「あたし」の質問に答えるが、「あたし」にはその返答が腑に落ちなかった。「あたし」に「よくわからなかった」のは、どうして「彼」がその仕事をする必要があったかである。この点を尋ねた「あたし」に「王子」は「誰かがしなければならぬから」だと応じるが、「あたし」は「重ねて」、「長く生きられない」にもかかわらず、「どうしてあなたが、その『誰か』

を務めるのかを問う。すると「彼」は、「君なんかには、僕らのやっていることの尊さはわからないさ」と言い、そのときの彼の目つきは、「あたし」には「馬鹿にしたような」ものに見えた。この応答に腹を立てた「あたし」は「彼」を邪険に扱い、「彼」がはばたいて「丘の上」(Ⅱ王子の像のあるところ)に向かうのを「ただ見送った」。

「あたし」の三つの質問と、それに対する「彼」の応答、さらに王子の応答を「あたし」がどのように受け止めたかを見ると、最終的に「あたし」と「彼」の間にある溝は、「誰かがしなければならぬ」・自己犠牲的な行為を・ほかならぬ「彼」がする理由があるか否かについての理解だとわかる。「あたし」にとっては「誰かがしなければならぬ」が自己犠牲的であるその行為を、ほかならぬ「彼」がする理由が疑問である。しかし、「彼」には事態はそのように見えていない。ほかならぬ「僕ら」が、その行為に出る理由を、ほかの誰かに任せることができ、また自己犠牲的であるという理由で疑問視する「あたし」が理解していない(そしてできない)のは、その行為にできる「僕ら」の「尊さ」である。つまり、「彼」はこの「僕ら」の自己犠牲的な行為に「尊さ」を見出しており、その「尊さ」を理解できない「あたし」は「馬鹿にしたような」目でみるべき相手なのだ。この内容に一番近いことを述べているのは②である。「自己陶醉だと厳しく批判する」という表現に疑問は残るが、他の選択肢の問題点に比べれば許容範囲だろう。

不正解の選択肢

①「生活の苦しさから救われようと『王子』の像にすがる町の人々の悲痛な思いを理解しない『あたし』という箇所が誤り。すでに述べたように、「あたし」が理解していない・理解できないと「彼」が考えているのは、

他の誰かがやってもいいはずの自己犠牲的な行為を、ほかならぬ「僕ら」がすることの「尊さ」だった。確かに、『王子』の像にすぎない町の人々の悲痛な思いは「あたし」の最初の質問に対する「彼」の応答で述べられている。しかし、その応答のうち「あたし」が「よくわからなかった」のは、その「思い」に込めるために、どうしてもほかならぬ「彼」が自分を犠牲にするのである。

③本文 38 行目に「あたしは彼をつかまえ、逃げられないよう足を踏んづけておいてから聞いた」とあるものの、「あたし」は「彼」に質問を重ねて、「彼」が何をしようとしているのかを知ろうとしていた。「あたし」のふるまいが「暴力的な振る舞いに頼るばかり」でも「理解しようとする態度を見せない」わけでもなかったことが読み取れる。

【Ⅱ群】

最終場面の「あたし」のモノログの中で「あたし」が自分に言い聞かせるように言った「まあいい。どうせあたしにはわからない」という発言の意図を問う設問。傍線部の直後だけを読むと「あたし」は「彼」について考えるのはやめようと割り切ったようにも読み取れるが、68 行目の「それでも」に続く部分では、すでにいなくなってしまった「彼」の行動に影響を与えた「幸福な王子」の意図を確認したいという「あたし」の思いが描かれている。この内容に最も近いことを述べている③が最も適当である。とりわけ、選択肢の前半の記述は本文 62 行目からの「彼はなぜ、あの町に残ったのだらうか。貧しい人々を救うため、自分ではそう思っていたらう。(中略)でも本当のところは、大好きな王子の喜ぶ顔を見たただけではないか」とい

う「あたし」の推察に合致する。

不正解の選択肢

①『王子』の像を金や宝石によって飾り、祭り上げる人間の態度」は、「Ⅰ群」①の解説で述べた通り「彼」が説こうとしていたことではない。
②最後まで「彼」の意図がわからなかったことに対するわだかまりは抱えていると読み取れるが、「彼」を突き放したことに對しての後悔をしているということは本文中からは読み取れない。

問 4

7

正解 ②・⑥

解説

本文として与えられたふたつの物語の関係を問う設問。Y は有名な童話である X のパロディ的な物語である。X は町の人々のために命を「捨てた」「王子」と「一羽のツバメ」の崇高さ、すなわち他者のための自己犠牲の尊さを教訓としている。それに対して、Y の作者は、X では登場しなかった「あたし」というキャラクターの視点を物語の中心に据えて、「王子」と「彼」はあくまで彼ら自身の幸福のために命を「捨てた」とする見方を提示しており、作者独自の「捨てる」というテーマの表現になっている。六つの択からふたつを選ぶという難度の高い形式ではあるが、本問に関しては誤りの選択肢が排除しやすいものになっている。ひとつひとつ見ていこう。

- ① X を語る視点は神ではなく作者。また、X ではあくまで自己犠牲をしてい
た「ツバメ」と「王子」の心臓が天国に持ち帰られた（＝救われた）ので
あって、「普遍的な博愛」という物語のまとめ方にも違和感がある。Y に
ついて、神の否定や「王子」と「彼」のすれ違いに関する記述はない。
- ② X についての記述は物語の内容に合致する。Y についても本文 62 行目か
らの「あたし」のモノローグの内容にあてはまることから、ひとつ目の正
解は②。
- ③ Y で「あたし」は、「王子」と「彼」は彼ら自身の幸福のために命を捨て
ることを選んだと考えている。したがって、神の存在は描かれていないも
の、③のような「救いのない悲惨な結末」と解釈することはできない。
- ④ X の物語では神が「王子」と「一羽のツバメ」の崇高さを認めることから、
「誰にも顧みられることなく悲劇的に終わる」という記述が誤り。Y を恋
愛物語と読むことは難しく、仮にそう読んだとしても X の記述から「彼」
は残った町で命を落としたと推測できる。よって『「あたし」の思いの成
就を暗示する」という点が本文とは合致しない。
- ⑤ Y に関して、「彼」は見捨てられたわけではなく自らの意思で「王子」の
ために町に残ったのであり、群れのツバメに見捨てられたこと自体は悲劇
ではない。直後の「あたし」が救済したという旨の記述も本文からは読み
取れない。よって、Y を逆転劇としてみるのは不適切である。対して X は
選択肢の記述通り逆転劇の構造を持っていると考えてよい。
- ⑥ X についての記述は、「王子」と「一羽のツバメ」が神によって賞賛さ
れたという内容にあてはまる。Y に関しても、本文 69 行目を根拠に正し
い説明となっている。したがって、⑥がふたつ目の正解である。

問 5

8

5

10

正解

a

④

b

②

c

⑤

解説

【解説】

【I 群】の三つの文章の説明を、【II 群】という同一の選択肢群から選ぶ
という形式の問題。それぞれの文章について選択肢が多く解きにくさを感じ
たかもしれないが、冷静に考えればあてはまらないことが明白な組み合わせ
もあるため、形式の新しさに惑わされずひとつひとつじっくりと対処するこ
とが求められる。

【a】

【II 群】のすべての選択肢に「あたし」ないしは「彼」という語があり、
オスカー・ワイルドの「幸福な王子」のみに関する記述の選択肢がないこと
から、オスカー・ワイルドの作品自体の説明ではなく、この冒頭のあらずじ
が作品中で持つ役割が問われているということがわかる。次に、オスカー・
ワイルドの作品にのみ書かれた記述のある選択肢を探すと、④だけがそれ
にあてはまる。④の選択肢について詳しく見ていくと、本文 68 行目、すなわち
作品全体の最後で、「あたし」は「王子」に「彼」の行動の真意を尋ねる想
像をする。この時「あたし」は「王子」の像に何かが起こることはまったく
考えていないが、実際にはみすばらしくなった「王子」の像までもが人々に
よって溶かされてしまうという展開を迎えることになる。オスカー・ワイル
ドの作品のあらずじが冒頭にあることで読者がこの展開に気づくことができ
るという点で、④が a の説明として適当である。

【b】

ダッシュの役割を問う設問。ダッシュの役割としては「ある文章に対して挿入句を加え、直前の語句に情報を追加すること」や「語りの際の言いよどみや余韻を表すこと」などが挙げられ、これにあてはまりそうな【II群】の選択肢は②、③、⑤である。ここで⑤に関しては、bまでの本文に「あたし」による「王子」への言及がないことから不適当だといえる。残る②と③についてだが、本文中のbの続きに目を向けると、bの部分のより詳細な説明になっている。したがって、「言いよどみから『あたし』が『彼』に抱く不可解さを強調した」とする③ではなく、「具体例の後付け」とした②の文章がbの説明としてより適当である。

【c】

最終場面の「あたし」のモノログに関する設問。最初から外せる選択肢は、aの正解となりうる④と、「彼」の紹介の場面の記述であり最終場面のものではない②である。残った四つの選択肢に関して、ひとつずつ見ていこう。

①「あたし」のモノログと最終場面における物語の出来事は同時進行的に描かれ、周りの出来事に対して「あたし」が思ったことを書き連ねるといふ構成になっている。時間のずれは強調されていないため、①は不適当である。

③断定的な表現は少なく見えるが、これはモノログの時点では真相を知りようがない「あたし」の推測が続いているためであり「彼」に対する不可解さを強調する表現ではない。

⑤抽象的な内容ではあるが、物語全体の大きなテーマについての記述であり、cの説明として不適当だとする理由はない。したがって、⑤がcの説明と

して適当である。選択肢式問題の解答にあたっては、時にこのような消去法的アプローチも必要になる。

⑥「あたし」が「彼」について考えを巡らせている場面であるが、「王子」や「彼」のしようとしていたことが理解できないという点は最終場面まで一貫しており、「あたし」の内面的な成長というものは示唆されていない。

第 4 問 古文

講評	所要時間	難易度
講評	得意…15分 ふつう…20分 苦手…25分	★★★★★
<p>『源氏物語』の二種類の写本である【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】と、【文章Ⅱ】を書き写した際のエピソードを書いた【文章Ⅲ】の三つのテキストが出題された。複数の文章を関連づけながら読解させるという共通テストの新方針が顕著に現れている。一般に『源氏物語』は難易度が高いとされるが、今回の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】の場合、出題された文章が短かったうえ、内容もさほど難しくない。むしろ、よくよく整理しないと誤読しかねないような難しい箇所は【文章Ⅲ】のほうが多い。</p> <p>設問についてもいくつか変更がみられる。従来のセンター試験の問1で出題されていた語句の解釈を問う問題や問2の文法問題がなくなり、文章の内容・表現の理解を問う問題が増えた。特に問5・問6は複数の文章にかかわる設問であり、共通テストならではの形式だといえる。</p> <p>しかし、解答のために必要な能力はこれまでのセンター試験とあまり変わらない。文法と単語の知識を身につけ、本文を正確に読むことができれば、答えられない設問はなかったはずだ。</p>		

全訳

【文章Ⅰ】

(靉負命婦は帝に)例の(更衣の母からの)贈り物を(ご覧に入れる。(帝は、これが玄宗皇帝の命で幻術士が)亡き人(楊貴妃)の住みかを探し出したという、証拠の)かんざしであったら(どんなに喜ばしいことだろう)とお思いいなるが、全くむだなことだ。

(更衣の魂を)探し求めてくれる幻術士がいたらなあ、人づてにでも更衣の魂の居場所を(どこ)知ることができるように。

(帝が一日中眺めて暮らしていた『長恨歌』の)絵に描かれている楊貴妃の容貌は、素晴らしい絵師(の作である)とは言っても、描写する力には限界があったので、それほど美しさはない。太液の芙蓉、未央の柳(いずれも美人の形容)にも実に似通っている(楊貴妃の)容貌を(想像すると)、中国風の装束は見事だっただろうが、(帝が、楊貴妃と比べた桐壺更衣の)心惹かれる可愛らしい様子をお思い出しになると、(桐壺更衣の美しさは)花の色にも鳥の声にもたとえることが出来ない(ほど素晴らしい)ように思われる。

【文章Ⅱ】

(靉負命婦は帝に)例の(更衣の母からの)贈り物を(ご覧に入れる。(帝は、これが玄宗皇帝の命で幻術士が)亡き人(楊貴妃)の住みかを探し出したという、証拠の)かんざしであったら(どんなに喜ばしいことだろう)とお思いいなるが、全くむだなことだ。

(更衣の魂を)探し求めてくれる幻術士がいたらなあ、人づてにでも更衣の

魂の居場所をどこと知ることができるように。

(帝が一日中眺めて暮らしていた『長恨歌』の)絵に描かれている楊貴妃の容貌は、素晴らしい絵師(の作である)とは言っても、描写する力には限界があったので、たいそう美しさが少ない。太液の芙蓉にも誠に似通っている(楊貴妃の)容貌や顔の色つや、中国風の装束は見事で、清らかに美しくはあっただろうが、(楊貴妃と比べた桐壺更衣の)心惹かれる可愛らしい様子は、女郎花が風になびいているよりもなよやかで、撫子が露に濡れているより可憐で、(帝が)更衣の魅力的な様子をお思い出しになると、(桐壺更衣の美しさは)花の色にも鳥の声にもたとえることが出来ない(ほど素晴らしいように思われる)。

※穀負の命婦(更衣)の死後、帝が更衣の母の屋敷へ使いに出した女官。

【文章Ⅲ】

亡き父の光行が昔、五条三品(藤原俊成)にこの物語(『源氏物語』)のよく分からないところをひとつひとつ尋ね申しました中に、当巻(『桐壺』の巻)に、「絵に描かれている楊貴妃の容貌は、素晴らしい絵師(の作である)とは言っても、描写する力には限界があったので、それほど美しさが少ない。太液の芙蓉、未央の柳にも」と書いて、「未央の柳」という一句を見せ消ち(文字を見えるように消す)にしていた(所があった)。これを受けて、(父光行は)親行を使いとして、

「楊貴妃を芙蓉と柳にたとえ、更衣を女郎花と撫子にたとえる(描写は)、両方(比喩が)二句ずつで良く理解できますのを、(俊成卿の)御本で、『未央の柳』を消されたのは、どのような理由がございませうでしょうか」

と申したところ、

「私が、どうして自分勝手なこと(勝手に一部の語句を消すこと)をするはずがあるだろうか(いや、するはずがない)。行成卿(藤原行成)が自筆の写本で、この一句を見せ消ちになさったのだ。『(行成卿は)紫式部と同時代の人でありますから、(語句を消す)申し合わせをするようなこともございませう』ということだと思つてこれ(『未央の柳』)も墨をつけて消してはおりませんが、いぶかしく思い何回も(『源氏物語』)を見たところ、『若菜』の巻にて合点がいき、趣深く感じております」

(俊成卿が)申されたのを、親行が(父の光行に)この旨を語ると、

「若菜の巻には、どこに同類(の例え)があると申されていたか」と(光行が)言ったのに対し、(わたくし親行は)

「そこまでは尋ね申し上げていません」

と答えましたのを、(父は私を)さまざまに恥ずかしめ叱りましたため、私親行は家にじっと引きこもつていて、『若菜』の巻を何回か開いて見ると、(俊成卿の言葉の)意味を理解した。(『若菜』の巻には)『六条院の女試案では、女三宮は他の人々より小柄でかわいらしい様子で、ただお召しになっている衣のみがそこにあるような心地がする(のが)、美しさは不十分でありながらも、たいそう上品で若々しくて、二月の二十日ごろの青柳が枝をたらし始めたような心地がして』と書かれていた。柳を人の顔の比喩として用いることが度重なったことにより、(俊成卿は『未央の柳』の一句を見せ消ちになさいましたので)三品の(俊成卿)が和才(和歌や和文の才能)に優れているためにこの物語(『源氏物語』)の奥義まで極められましたのは、めったになく素晴らしいことである。それなのに、京極中納言入道(藤原定家)の家の写本に「未央の柳」と書かれている事もありますのでしょうか。また俊成卿の女(俊成の養女)に(『未央の柳』のことを)尋ね申しましたところ、(俊成

卿の女は)

「このこと(『未央の柳』)は代々の書写の誤りによって書き入れられたのでしようか、あまりに対句としての意図が見えすぎていて見苦しい感じがしたのでしようか」と云々(答えていた。)よって、私の写本(光行・親行親子が整えた本)ではこれ(『未央の柳』)を用いない。

設問解説

問 1
1

正解 ①

解説

傍線部の後に省略されている語を問う設問。基本的な語の意味を把握していれば、文脈と照らし合わせることで確実に正答できるだろう。

(注1)から、傍線部(ア)はこの世を去った桐壺更衣の形見の品を見た帝が、「これらの品々が、『長恨歌』で幻術士が死後の楊貴妃に会った証拠として持ち帰ったかんざしのように、桐壺更衣の魂に会うことができた証であれば」と思いを巡らせる場面だとわかる。反実仮想が使われている、つまり実際はそうではないことを考えると、その後続く表現は亡き更衣の魂のありかが分かっていた場合に感じる感情を表すものになるとわかる。それは「喜び」だろう。よって、「どんなに喜ばしいだろう」という意味の①が正解となる。

他の選択肢を見ていくと、③⑤はそれぞれ「どんなに無念だろう」「どんなに甲斐がないだろう」といったネガティブな意味を表すため誤り。また、「更衣の魂のありかが分かる」ことに対する心情であるため、②(『どんなに

見苦しくないだろう』)や④(『どんなに趣があるだろう』)も不適当である。特に④は正解になってもおかしくない選択肢ではあるものの、「桐壺の更衣の魂のありかが分かることが帝にとって「趣がある」だけでなく、「嬉しい」ことだと想像することは、帝の更衣に対する感情の深さを考えると容易である。

不正解の選択肢

- ①前半が不適当。浮舟の匂宮に対する心情は第1段落1文目で述べられている。ここで浮舟は「すこしもあはれと思ひ聞こえけむ心ぞいとけしからぬ」、つまり「少しでも(匂宮のことを)いとおしいと思ひ申し上げた(私自身の)心は本当に道理から外れている」と匂宮に対して好意を抱いていた自分を責めている。したがって、選択肢のいう「匂宮に対して薄情だった」という反省とは正反対の評価を過去の自分に下している。
- ②後半が不適当。第1段落1文目に「なごてをかしと思ひ聞こえけむ」とあるように、浮舟は匂宮と二人で過ごしたこと(「匂宮と一度は結ばれたこと」)を否定的に捉えており、彼に対して「愛情を覚え満ち足りて」はいない。
- ③後半が不適当。第1段落2文目前半によれば、薫の匂宮への愛情は「薄き」愛情、つまり淡泊なものであり、「情熱的に愛情を注いでくれた」とは述べられていない。
- ⑤全体が不適当。浮舟は「よそながらに」||「遠くからであっても」薫を見ることを期待する気持ちがある一方で、「かくだに思はじ」とその期待を自分で批判している。詳しくは解説で行った整理を参照してほしい。

問 2 2

正解 ④

解説

【文章Ⅰ】中の和歌の解釈や技法への理解を問われる設問である。この問題において重要なポイントは、「幻」の意味を把握できたかどうかだ。和歌をそのまま訳してみると「尋ねていく『幻』があれば（いれば）なあ、人づてにでも魂のありかをそこと知ることができるように」となる。

ここで、注において触れられている「長恨歌」のエピソードに再度着目しよう。玄宗皇帝は、楊貴妃の魂のありかを探すように幻術士に命令している。このエピソードと「人づてにでも」という和歌の訳を組み合わせて考えると、「幻」とは更衣の魂のありかを探し当ててくれる「幻術士」のことであると読み取ることができる。また、「もがな」は「しか」「てしか」といった自己に対する願望とは違い、他者に対する願望を表している。よってこの和歌は、

「（更衣の魂を）探し求めてくれる幻術士がいたらなあ、人づてにでも更衣の魂の居場所をどこと知ることができるように。」

という意味になる。「幻術士がいたらなあ」という内容であることから、「幻術士になって更衣に会いに行きたい」という内容の歌である、と解釈した④が誤り。

不正解の選択肢

①縁語は「雪」と「降る」のような関連のある単語を、文脈と関係なく和歌中に用いる技法である。また、掛詞は同音異義を利用し、ひとつの語句（基

本的にひらがなで書かれる）に「松」と「待つ」のようなふたつの意味を持たせるものである。傍線部の和歌ではこれらは用いられていないので正しい。これを機会に基本的な縁語や掛詞をチェックしておこう。

②正しい。本来の語順は「つてにでも魂のありかをそこと知るべく尋ねゆくもがな」である。

③「もがな」は願望の終助詞であり、傍線部の歌でも「幻術士がいればなあ」という帝の願いを表している。よって正しい。

⑤【解説】で示した通り、「長恨歌」中の玄宗皇帝が楊貴妃の魂を探させたエピソードを踏まえている。正しい。

問 3 3

正解 ①

解説

【文章Ⅲ】中の登場人物のセリフの意味を問う問題。「自由の事」の意味が最初は分からなくても、文の流れを確認することで解釈することができるだろう。

傍線部を含む俊成のセリフは、「未央の柳」が見せ消ちにされていた理由を尋ねる親行の問いに対する答えである。傍線部の後に俊成は、行成卿の写本に倣ってこの一句を見せ消ちにしたと答えている。よって、その前に存在しうる表現は「自分で自由勝手に語句を見せ消ちにするわけがない」という意味が入りうると考えられ、①が最も適切である。「いかでか」は「どうしてするだろうか、いやしない」という反語表現であり、「しる」は「認め

る、判断する」という意味で、打消表現を伴って「できる」という意味をもつ。

他の選択肢については、見せ消ちにされていた理由の説明に上手くつながらず、訳としても誤りであるため不適。

問 4 4

正解 ⑤

解説

【文章Ⅲ】中の傍線部について、適当な説明を選ぶ問題。傍線部を訳すと「見せ消ちになさいましたのでしよう」となり、解答のポイントは「未央の柳」を見せ消ちにしたのが誰なのかを読み取ることである。

判断の手がかりとなるのは、続く文「三品の和才優れたる中に」だ。ここでいう「三品」は「五条三品」で、「源氏物語」の奥義を理解した俊成を称賛するものである。よって、見せ消ちを行ったのは俊成であるため、文中の敬語は俊成への敬意を表し、⑤が正解である。他の選択肢について検討する。

不正解の選択肢

① 前述のように傍線部の主語は見せ消ちを行った俊成であるため誤り。また、(注2)のように見せ消ちは写本の際に行うものであり、『源氏物語』の著者である紫式部が見せ消ちを行う理由はない。

② 傍線部に用いられている尊敬語「らる」の対象は見せ消ちを行った俊成で

あり、丁寧語「侍り」は広く読者に向けたものであるため、行成への敬意は示されていない。よって誤り。

③ 親行は見せ消ちを行った俊成を称賛しており、不満は読み取れないので誤り。

④ については、【文章Ⅲ】の冒頭に「亡父光行」とあることから既に亡くなっている光行は読み手となり得ないので誤り(傍線部の丁寧語「侍り」は広く読者への敬意を表す)。

問 5 5

正解 ③

解説

【文章Ⅱ】の楊貴妃と更衣を比較している部分の表現について、その意義を問う設問である。二重傍線部中では、「唐めいたりけむりありけめ」が楊貴妃、「なつかしうし思し出づる」が桐壺更衣の描写となっている。ひとつひとつ選択肢を確認し、消去法で答えを導く。

① 過去推量の助動詞「けむ」は楊貴妃を表す表現にのみ用いられ、更衣についての表現では用いられていない。傍線部が帝の視点であることと、更衣に用いられている「き」は直接経験した事実に対して使われることを踏まえると、「けむ」と「き」を使い分けることで「長恨歌」でのみ知っている楊貴妃と、実際に会っている更衣を区別していると考えられる。よって、「楊貴妃と更衣の対比」とした①は適当である。

② 「けうらにこそはありけめ」の「けうら」とは、気品あり華麗なさまを表

す「きよら」に由来するとされ、清らかな美しさを表している。この表現が「中国的な美しさ」を表しているかどうかは判断しにくいかもしれないが、「唐めいたりけむよそひ」と合わせて考えると適当だと考えられる。

③ 「女郎花の風になびきたるよりなよび」という表現は、更衣の不運の象徴ではなく、更衣のなやかな優美さを表すものである。また、楊貴妃と比較して桐壺更衣の魅力を称える場面で「幸薄く薄命」というネガティブなイメージについて記述するのは不自然だ。よって、③は不適当である。

④ 適当。更衣の美しさは「撫子が露に濡れているより可憐で」と表現されており、撫子と比較した表現が「更衣の可憐さを引き立てている」という説明に矛盾はない。

⑤ 「〇〇よりも△△」という表現で、更衣が比較されている花々よりも美しいことが示されている。よって、更衣の魅力を強調する表現と捉えた⑤は適当である。

問 6 6

正解 ③

解説

【文章Ⅲ】 全体の内容理解を問う問題。問 5 同様、それぞれの選択肢を丁寧に確認し消去法で答えを導く。

① 「未央の柳」が削除されたのは、柳を人物の比喻として用いる描写が「若菜」の巻中の表現と重なってしまったためである。【文章Ⅲ】中で季節に関する検討は行われていない。

② 前半部分は【文章Ⅲ】中で「代々の書写の誤りによって書き入れられたの

でしょうか」と推測していた俊成の女のセリフにおおむね合致するが、「俊成から譲られた行成自筆本」という情報は本文中に存在しない。また、行成自筆本ではその部分が元々見え消ちになっていたものであって、俊成の女が「墨で塗りつぶした」という記述は誤りである。

③ 本文中には、光行が「親行を使ひとして」質問したとあり、「太液の芙蓉、未央の柳」の表現について「二句ずつにてよく聞こえ侍る」と評価している。よって、選択肢③が本文中の内容に合致する。

④ 光行は「若菜の巻を読むように」親行を叱ったのではなく、若菜の巻のどこに同類の比喻があるかを尋ねなかった事について叱ったのである。

⑤ 俊成の女は定家の写本で「未央の柳」が含まれていることに関して「伝々の書写のあやまりに書き入るるにや」と述べており、①で示した通り書写の誤りと認識している。「はっきり残すように指示した」という描写は文章中にない。

第5問 漢文

講評	所要時間	難易度
評	得意…15分 ふつう…20分 苦手…25分	★★★★☆
<p>司馬遷『史記』から抜粋された【文章Ⅰ】の漢文と、江戸時代の儒学者・佐藤一斎の関連する漢詩及びその解説を高校生がまとめた【文章Ⅱ】という二つのテキストを読ませる問題。【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】ともに漢文の分量はそれほど多くなく、また漢詩には訳と説明もつけられていたため、文章を読むこと自体はそれほど難しくはない。</p> <p>設問については、従来のセンター試験ではみられなかった新形式の設問である問5～7が重要だ。問5は日本の文学史の知識を、問6・7は【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】の二つのテキストを関連づけた読解を要求するという点が目新しい。</p> <p>しかし、新しく様々な形式の設問が出題されているとはいえ、問われていた文学史の内容は基本的なものだし、問6・7も従来にはない特別な読解能力を必要とするわけではない。さらに、問1～4は従来のセンター試験でも定番だった種類の文法・読解問題である。したがって、漢詩も含めたセンター試験対策をじゅうぶんに行った受験生が解答に困るような問題は少なかったはずだ。</p> <p>今回のような関連したふたつのテキストを受験生が自力で用意するのは難しいだろうから、これまで通り過去のセンター試験を中心に多様な種類の漢文の読解練習をつむことに加え、従来は問われなかった文学史的な基礎知識を身につけていくことが有効な対策だろう。</p>		

書き下し

呂尚は蓋し嘗て窮困し、年老いたり。漁釣を以て周の西伯に好む。西伯將に出でて獵りせんとし之を卜ふ。曰はく、「獲る所は龍に非ず、彫に非ず、虎に非ず、羆に非ず、獲る所は霸王の輔けなり」と。是に於いて周の西伯獵りす。果たして太公に渭の陽に遇ふ。与に語りて大いに説びて曰はく、「吾が先君太公より曰はく、『当に聖人有りて周に適くべし。周以て興らん』と。子は真に是れなるか。吾が太公子を望むこと久し」と。故に之を号して太公望と曰ふ。載せて与に俱に歸り、立てて師と為す。

全訳

呂尚はそもそも以前に貧乏にひどく苦しみ、年老いていた。釣りをして周の西伯に知遇を得ることを求めた。西伯は今から外に出て狩りをしようと思つてこれ(狩りの結果)を占った。(占いの結果は)「(西伯が)獲得するものは龍ではなく、彫ではなく、虎ではなく、羆ではなく、天下を取る者の補佐役である」と出た。こうして周の西伯は狩りをした。案の定、渭水の北岸で呂尚に出会った。(西伯は呂尚と)一緒に語つて大いに喜んで、(呂尚に)「私の亡き父の代から、『きつと高い学識や人徳を持つ人がいて周に来るだろう。(その人によって)周は繁栄するだろう。』と言われている。あなたが本当に

その人なのだなあ。私の父はずっとあなたを待ち望んでいた。」と言った。こういうわけでこれ(呂尚)を太公望と名付けた。(西伯は呂尚を)車に乗せて一緒に帰り、敬って師とした。

設問解説

問 1

1	2
---	---

正解 (1) ① (2) ⑤

解説

さまざまな読み方をする漢字の読みを問う設問。漢字の意味を問う問もそうだが、この種の問題で、「文の意味が通るか」「前後の文脈に照らして不自然ではないか」だけを手がかりに考えるのはよくない。文自体の意味は通り、前後の文章とも自然につながるが、その漢字の読み方・意味としては不適當なものを選ぶ危険があるからだ。そこで、まずは問われている漢字の読みと意味にかんする自らの知識を整理して、その知識から確実に誤りとわかる選択肢を除外しよう。そのうえで文脈にふさわしい読みと意味を検討するのが安全だ。このような段階的なプロセスを踏むことで確実に正答を導きたい。

(1)

まずは問われている漢字の読みと意味を確認しよう。「嘗」という字には「かつて」「なむ」「こころム」という三つの読み方がある。原義は動詞の「なむ」、すなはち「なめて味をみる、経験する」という意味であり、そこから動詞「こころム」の「ためす」という意味、および副詞「かつて」の「以前

に」という意味がうまれた。この時点で、③・⑤はこれらの意味のどれにも合致しないことから誤りだとわかる。

残った選択肢を検討するために、波線部前後の文脈をみておこう。「嘗」直後には「窮困し、年老いたり」という内容が続く。先ほど整理した三つの意味のうち、「なめて」及び「こころみに」では文意が通らないことは明らかである。一方、呂尚は「以前は」困窮していた、という内容であれば、この個所だけみても不自然でないし、本文全体との整合性もとれている。したがって①が正解。

(2)

「与」は多くの意味・用法を持つ重要な漢字なので、大学入試でも頻出だ。受験用参考書でも必ず取り上げられているはずだから、以下の解説は、そこで整理された意味・用法を参照しながら読んでほしい。

まず、漢字「与」の読み方として不適切な③及び④が除外できる。次に、波線部を含む一文の文意・波線部前後の文脈との整合性などを手がかりに残る三つの選択肢を検討していく。①～③の読み方をしたとき、「与」はそれぞれ、①「与える」、②「参加する・関係する」、③「一緒に」という意味を表す。傍線部を含む一文全体を見たとき、①～③のいずれの読み方も文法上の問題はない。したがってこれも解答の根拠にはならない。しかし、波線部を含む一文の文意を考えると、①の場合「何を」与えるのか、②の場合「何に」参加する・関係するのが明確でない。この「何を」「何に」は前後の文章をみても自然に補えるものではないので、①と②は不適当だとわかる。他方、呂尚と西伯が渭水で出会ったという波線部直前の記述を踏まえると、彼らが「一緒に」語らうという③の解釈は自然である。したがって正解は⑤。

問 2

3

4

正解

(ア)

②

(イ)

④

解説

(ア)

「果」は「はたして」と読み、「予想通りに・やはり」という意味を表す。したがって②の「案の定」が正解となる。これは現代語「果たして」にはない意味だが、漢文ではよく用いられるので注意が必要だ。西伯は「霸王の輔」と出会えるという占いを得ており、呂尚に出会おうのを期待していた。このことから、「果」は「案の定」という意味で解釈するのがふさわしいといえる。ほかの選択肢はどれも漢字「果」にはない意味を挙げているので誤り。この問題は、問1の解説冒頭で述べた、文意の自然さや文脈との整合性だけを手がかりに解くと間違えかねない問題の典型だった。補足としてこの点を解説しておく。

まず、傍線部前後の文脈をみよう。狩りをすれば「霸王の輔」を獲得できるといってお告げを得た西伯が、呂尚に出会おうのを期待して狩りに出かけ、出かけた先の渭水北部で呂尚と出会う、というのが3〜5文目の流れである。このとき、「西伯が呂尚に出会った」という出来事は、西伯の視点からは、④「やつのこと」と形容されても不自然ではない出来事だろう。西伯は「霸王の輔」を探していた。その彼にとって呂尚との出会いは、「やつのこと」(占いのお告げ通り)「霸王の輔」になりうる人物に出会えた出来事とも捉えられるからだ。さらに、「結果」「果実」といった「果」の用法を踏まえると、「果」に「やつのこと」という意味があると推測しても無理はない。おそらく、④はこのような考え方で誤答する受験生が出ることを想定して設けられた選択肢だろう。

(イ)

再読文字「当」の用法を問う設問。「当」の字を再読文字として用いる場合、「当然くすべきだ」と「きつとくだろう」という二つの意味がある。まず、このどちらにも該当しない②・③・⑤は不相当である。

次に、ここでの「当」が①・④どちらの用法であるかを考えるために、「当」を含む一文の意味、および傍線部前後の文脈を確認する必要がある。まず、この「当」が用いられている太公の発言全体をみてみよう。「当」を「きつとくだろう」の意味で解釈したとき、太公の発言を、将来的に周の国を聖人が訪れ、それによって周が繁栄することを予見したものと読むことになる。他方、「当」を「当然くすべきだ」の意味でとった場合、発言は「それによって周が栄えるような聖人が周の国を来訪すべきだ」といった趣旨になる。周の国を治めていた太公にとって、聖人が周を訪れることを予期すること、当然あるべきことだと考えることは、どちらも自然なことだ。つまり、太公の発言だけを読んでも、「当」の意味を特定する手がかりとしては不十分だ。

そこで次に、太公の発言の前後から、手がかりになりそうな記述を探すとになる。この太公の発言は西伯の台詞のなかで引用されたもので、まずは西伯の台詞から手がかりを探そう。有用なのは、太公の発言の直後、傍線部が引かれた「子は真に是れなるか」の一文だ。これは呂尚と出会い、彼こそが太公の待ち望んだ「聖人」だと確信した西伯の一言である。太公の発言が「聖人が周に来るべきだ」という主張だった場合と「聖人が周に来るだろう」という予期だった場合を比べたとき、どちらの場合で西伯の一言がより自然になるかは、理屈のうえでは非常に微妙だ。しかし、直観に頼ったとき、より自然な気がするのは後者である。したがって、正解は④である。

問 3

5

正解

⑤

解説

センター試験でもよくみられた、本文の一部を白文のままにしておき、その返り点・送り仮名のつけ方と書き下し文を考えさせる設問。傍線部の文型・句法・重要な漢字の解釈・前後の文脈との整合性などに注目して、消去法的に解答を導きたい。

本問の最初の鍵となるのは、重要な漢字「将」の解釈である。五つの選択肢に目を通すと、「将」の解釈に大きな違いがあることがみてとれる。まず、①・⑤は「将」を再読文字として読んでいるという点で残りの選択肢と異なる。さらに、①・⑤の間にも、前者が「将」を「まさニくベシ」と読んでいるのに対し、後者は「まさニくセント」す」と読んでいるという違いがある。残る②・④はそれぞれ、②「將軍・軍の司令官」という意味の名詞、③は選択・推量の意味を表し、後ろの動詞を修飾する副詞、④「統率する」という意味の動詞として「将」を解釈している。

まず、この中で文法的に誤っているものは①である。「将」を再読文字として用いる場合、書き下し文では「まさニくセント」す」となり、「まさニくベシ」となることはない。他方、残る四つの選択肢には、「将」の解釈について文法的な誤りがない。そこで、各解釈をとった場合、傍線部が意味の通る文になるかどうか、前後の文脈と整合的になるかどうかを根拠に解答を絞っていく。

最初に、傍線部前後の文章から傍線部の読解にかかわる文を見つけよう。傍線部直前の二文は、西伯ではなく呂尚について述べているので、傍線部の内容にはかかわらないことが明白だ。一方、傍線部直後の二文は傍線部の内

容と関係する。まず、「曰はく」で始まる一文は、傍線部でふれられた「ト」つまり占いの結果を述べている。また、次の「是に於いて」の一文は、占いの結果を得た西伯が狩りに出かけたという内容だ。この二文からは、狩りに出かけるのが西伯自身であること、西伯は傍線部の時点ではまだ狩りに出かけていないが、出かける意思はあること、西伯は傍線部の時点ではまだ狩りに出かけるのふたつがわかる。この二点と整合的なのは、「西伯が今まさに狩りに出ようとしてこれを占った」という意味になる⑤である。

不正解の選択肢

①解説で述べた通り。
 ②「西伯の将は外に出て狩りをしてこれを占った」という意味になる。しかし、解説で確認した通り、狩りに出て呂尚と出会ったのは西伯本人であり、さらにほかの個所で「西伯の将」という人物は登場しない。また、これも解説で確認した通り、傍線部の時点では西伯はまだ狩りに出かけていないので、「狩りをしてこれを占った」というのもおかしい。よって②は不適。
 ③「将」を「はた」と読む用法をちゃんと説明するのは難しい。権威ある漢和辞典である三省堂『漢辞海』・角川の『新字源』や定番参考書『新明説漢文』もそれぞれ微妙に違う整理をしている。このような事情から詳細な説明は省くが、いずれの整理にしたがった場合も、文法的に問題があるもしくは本文のほかの記述と整合的にならない。したがって③は不適。
 ④「西伯が狩りに出たものを統率してこれを占った」という意味になる。②と同様、西伯以外の・ほかの個所では登場しない人物が狩りをしている点および傍線部の時点ですでに狩りが行われている点がおかしい。したがって④は不適。

問 4 6

正解 ③

解説

本問の正解を導くためには、「子」と「邪」、ふたつの字の意味を正確に判断する必要がある。

まず、会話文中の「子」は基本的に「し」と読む二人称の人称代名詞であり、「あなた」などと訳す。本文中、西伯の父に関する言及はあっても西伯の子の話はしていないことから、「子」は「我が子」ではなく「あなた」という意味で解釈する方がふさわしいといえる。この時点で①・④・⑤の選択肢は誤りだとわかる。

次に、「邪」の意味を考える。ここでの「邪」は助字として用いられている。助字「邪」には疑問・反語・詠嘆の意味があるが、選択肢②・④は反語、③・⑤は詠嘆でそれぞれ解釈している。①はこの三つのどれでもないの、この時点で誤りだとわかる。①が疑問・詠嘆でないことは明らかだが、反語として解釈した場合にも、①の「くちがいない」のような強い肯定として訳されることはありえない。なぜなら、「子真是」の部分は肯定文であり、肯定文に反語表現を加えてできるのは否定文でしかないからだ。

したがって、残る②・③のどちらがより適当かを判断するために、反語と詠嘆のどちらかふさわしいかを文脈に即して検討することになる。そこで、まず傍線部の文意を少しでも明確にするために、傍線部および選択肢の現代語訳中にある指示語「是」⇨選択肢の「その人」が指す対象を確認しよう。「是」⇨「その人」が指すのは「聖人」である。このことは、傍線部の直前が、西伯の亡き父親⇨先君太公が周の国への聖人の訪れを予期あるいは当然視していたという内容であることからわかる。つまり、傍線部の「子真是」

という個所は、「あなた⇨呂尚はほんとうに（父・太公がいつていた）聖人だ」という内容になる。もし本文のほかの個所で「呂尚は実際には聖人ではないと西伯は考えている」ということが述べられていた場合、傍線部は「子真是」と反対の内容を述べているはずなので、「邪」は反語だということになる。逆に、ほかの個所から「呂尚は聖人だと西伯は考えている」ということが読み取れる場合、傍線部は「子真是」通りの内容を述べているので、「邪」は詠嘆で読むべきだとわかる。

傍線部以降、西伯が呂尚に太公望という名をつけ、師として敬ったというふうに話が展開することから、西伯は呂尚こそが太公の言っていた「聖人」だと考えていることが読み取れる。したがって、先ほどの整理にしたがうと、「邪」は詠嘆で解釈するのが適当である。以上より、「子」「邪」の二つの意味が正確に取れている③が正解である。

問 5 7

正解 ①・⑥

解説

漢詩の知識を問う設問。選択肢のうち①⇨③は漢詩の形式にかんする説明、④⇨⑥は日本の漢詩の歴史にかんする説明である。

漢文と漢詩の問題を一度に出題するのは、複数のテキストを関連づけて読ませるといった共通テストの新しい試みの一環だ。しかし、漢詩そのものはセンター試験でも度々出題されていた。本設問でいえば、①⇨③の漢詩の形式にかんする説明は従来のセンター試験対策の範疇だろう。したがって、通常のセンター試験対策ができていれば、問の半分は容易に解けたはずである。

他方で、日本における漢詩の歴史がセンター試験で問われたことはほとんどなかった。このため、これまで通りのセンター試験対策をしてきた受験生にとって、④～⑥の選択肢の内容はなじみが薄かったかもしれない。とはいえ、ここで問われている文学史の知識はごく基本的なものだ。たとえば『懐風藻』という有名な漢詩集がかなり昔にあったはずだ、というおぼろげな知識があれば、④・⑤がおかしいということに気づけただろう（『懐風藻』は八世紀中ごろに完成した日本最古の漢詩集である）。

①一つの句が七字で構成される詩を七言詩、四句からなっている詩を絶句という。七字からなる四つの句で構成されている【文章Ⅱ】の詩は七言絶句である。また、第一句、第二句、第四句の末字はいずれも「二」の母音で押韻している。したがって①は正しい。

⑥日本人は漢詩と古くから接し、教養として身に着けていた。したがって、⑥は正解である。

不正解の選択肢

②この詩は四句からなる七言絶句であり、八句からなる律詩ではないので②は誤り。なお、「第一句と偶数句末で押韻し、対句を構成する」という記述は律詩の説明としては正しい。

③絶句・律詩は近体詩(唐以後の漢詩)に分類され、古体詩(近体詩成立以前の詩、もしくは韻律の規則に従わない詩)と区別される。したがって、この詩は古体詩ではない。また、首聯・頷聯・頸聯・尾聯はこの順に五言律詩の二句ごとの組の名称であり、古体詩とは無関係である。よって③は誤り。

④漢詩は儒教が広まった江戸時代には寺子屋などでもその素養が教えられ、日本人の創作活動のひとつになっていた。したがって④は誤り。

⑤和製漢詩の最盛期は、儒教とりわけ朱子学が広まり、中国文化が重んじら

れた江戸時代から明治初期である。しかし先にふれた『懐風藻』が示すように、日本人が漢詩を作るようになったのは江戸時代ではない。したがって⑤は誤り。

問 6

8

9

正解

A 群

③

B 群

⑤

解説

センター試験には見られなかった調べ学習という体裁ではあるが、求められているのは【文章Ⅰ】の漢文の正確な読解である。また、A群とB群の選択肢の間に明らかな対応関係があることから、組み合わせの絞り込みも容易に行うことができるだろう。本解答も、A群の選択肢をB群の選択肢と対応させながら吟味していく。

【A群①】

B群の選択肢①・②と対応している。文王つまり西伯と呂尚の出会いの場面に關する問いである。二文目の「呂尚以漁釣奸周西伯」、また五・六文目の「於是周西伯獵。果遇太公於渭之陽」という記述からわかるように、ふたりの出会いは、狩りに出かけた西伯が釣りをしていて呂尚に出会ったというものである。したがって、A群①の記述は正しく、B群①、②の記述は誤りである。

【A群②】

B群の選択肢③・④と対応している。「太公望」という言葉の現在の使われ方を知っているかを問う問題である。「太公望」という語は釣り師のことを指し、B群の③や④のような意味は持たない。したがって、A群は正しい。

【A 群③】

B 群の選択肢⑤・⑥と対応している。「太公望」という名前の由来は、西伯の言った「吾が太公子を望むこと久し」の部分であり、「吾が太公」、すなわち西伯の父である太公が望んだ人物というところから来ている。よって、「西伯が望んだ人物」となっている A 群③は誤りである。B 群のふたつの選択肢を見ると、⑥は「子」の解釈がおかしい。この西伯の発言の中の「子」は、問 4 で解説したように、二人称の「あなた」という意味であり、「子孫」という意味ではない。よって、「先君太公の望んだ人物」とした B 群の⑤が A 群の③を正しく改めているといえる。

問 7

10

正解

⑤

解説

【文章Ⅱ】の漢詩の内容に関する問題。現代語の通釈と解説が書かれており、漢詩の内容理解そのものは難しくない。しかし、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の比較、さらには小説問題のような緻密な心情読解が求められる点で難易度の高い問題である。

本問の主題となっている、【文章Ⅱ】で描かれた【文章Ⅰ】とは異なる太公望の姿を現代語の通釈をもとに考えてみよう。佐藤一斎の漢詩によれば、太公望にとって、周に行ったことは実は不本意なことで（第一句）、本心では「釣り竿一本だけの風月」、すなわち釣りをしながら素朴に暮らすことを望んでいた（第二句）。傍線部にある通り、このような太公望の心情は、【文章Ⅰ】からは読み取れない佐藤独自の解釈だ。この大筋を理解した上で、選択肢が取り上げている「謬りて」「心と違ふ」「夢」の三力所をくわしくみていく。

まず、第一句「謬りて」は通釈で「不本意にも」と訳されているように、西伯に連れていかれる際の太公望の後ろ向きな気持ちを佐藤一斎が代弁したものである。①は「謬りて」が「間違っ」ての意で解釈されているのが誤り。さらに、漢詩中に太公望が「控え目」だったと読み取れる記述がないこと点も問題だ。また、第一句・第二句が表現しているのは西伯に連れられて周に行ったときの太公望の心情であり、殷を討伐した際の心情を表すものではない。したがって②も誤りである。

第二句の「心と違ふ」は、周で西伯の補佐をした現実の自分のあり方が、「釣りをして過ごす」という太公望本人の理想と乖離しているという意味である。③は釣りをして人生を終えるということに対して太公望が否定的であるかのような記述であるため誤り。④についても、太公望の理想は釣りをするだけの生活であり、補佐役としての待遇は求めていないので誤り。また、呂尚の太公望に対する待遇が悪かったということは佐藤の漢詩からは読み取ることができない。

第四句「夢」の直接の内容は、第四句「昔の釣り磯」である。太公望がなぜ「昔の釣り磯」を夢に見るかと言えば、太公望には「釣り竿一本だけ」の日々を送りたいという本来の望みがあったからだ（第一句）。したがって、故郷の釣り磯で釣りをして過ごすという太公望の願いを正しく説明した⑤が正解となる。⑥の太公望が故郷の領主になることを望んでいるという内容はどこからも読み取れない。むしろ、これは「釣り竿一本だけの風月」という明記された願いとも矛盾するような内容である。したがって⑥は誤り。